グローバル化と日本語の標語

国立病院機構九州医療センター
臨床研究センター長
岡田　靖

近年，医療のグローバル化の波が押し寄せてきており，TPP論議では，外国資本の参入や国民皆保険への影響が懸念されています．一方，新薬開発の世界ではわが国は近隣諸国をリードすべきところ，治験体制の遅れで，国際臨床試験の受け入れ実績や実施体制，治験の質，症例の集積性，スピード，コスト等の面で，その国際評価は低く，むしろ台湾，韓国の方がアジアのリーダーになっています．

2011年末に東京医療センターの皆様のお世話になり，台湾へ国際臨床試験の視察に行く機会を得ました．台湾では2000年頃から国を挙げて新薬創出のための臨床試験の基盤整備を進めており，政府，企業，大学が一体となって活動しています．米国食品医薬品局（FDA），欧州医薬品審査庁（EMEA）の査察にも対応するTop quality（最高の品質），Fast speed（IRB承認・試験開始・患者募集登録までのすべてのプロセスが早い），Competitive costで，品質の高い治験が実施され，早期臨床試験に高い実績を誇っています．一方，日本はどうかというと治験施設・実施者基準があいまいで，医師のインセンティブもまだ低く，治験完了までのスピードもはかばかしくない状況です．そんな中で国立病院機構本部主導治験はこの7年間で体制整備が徐々に充実し，今後の日本の治験を牽引していくことが期待されます．

グローバル化は，さまざまな業界で論議されており，よい点，悪い点双方を持ち合わせているように思います．とくに医療の場合にはグローバル化については，十分な説明や情報提供が必要です．昨今の企業の不祥事をみますと「ガバナンス」が悪い，「コンプライアンス」違反とか，医療においても「ガイドライン」，「アドヒアランス」，「ナラティブな」医療の推進，「ヘルスケアメディエータ」，など「カタカナの欧米標語」でお説教し，最新の情勢や大事な点を伝えようとする傾向がみられます．しかし臨床の本来あるべき姿勢には，これら欧米の標語では言い尽くせないものや微妙なずれがあり，医療現場の意識や連帯に齟齬（そご）を生じているように思います．私たちは，永年培われてきた日本の大切な言葉が発する，味わい深い意味を一つ一つ噛（か）みしめながら日々の生活や医療を実践したいものです．

私は2012年の臨床姿勢として，5つの言葉を心に刻みながら活動することを誓いました．まず仕事の流儀としての「誠実」「丁寧」「配慮」であり，これを日々心に刻んでいれば，「コンプライアンス違反」「マニュアルのプロセスを無視した」「コンフリクト・マネジメント」などということは不要になるかもしれません．さらにそれを実践するための日々の心がけとしての「精進」と「常備」を挙げました．一心不乱に日々努力を積み重ねて上達を目指す「精進」，この世界不況や東日本大震災後の世の中にあって，いつでも出番を待って準備しておく「常備」の姿勢が大事だということを自ら肝に銘じたつもりです．国立病院機構にはグローバルという言葉より，大切な日本語で心一つになって世界の医療界に肩を並べる姿が似合いそうです．